諢話浮世風呂三編 下

国立国語研究所
28091
図書館

中村三郎文

諢話浮世風呂三編巻之下

女中湯之遺漏

江戸戯作者　式亭三馬戯編

午時の自鳴鐘

名代のひやうきん者とよばれしかしきん。浮世風呂の一ツまつばやとこんぶくろの所てきさうの。ひらきとの鳴て。

ゆきとのきりつ。水ふのうきのうけざるよりうの。ぜんとう。

「ぜんとう」「おもしろ」「おもしろ」も今おん節と祝ふこと。寝とるーにどんぶり

あつまる

温らうとらふ後ぶぶ。大きる寝ぶぶのう。我なぶらなぜちんあ

ぶぶぶ

えどぐすりの江戸者と等ぶんでござる。ハイ冷物く。減多ふむじゃう辺ぶ角を溝

獅子がぎ弄辺ぼとうぶらうぞ。アハ〳〵ト ひぼぶゆうく

どうもこみ敷くもお並びなとつぶ。私へ跡ぶぶよ。ボンヨドリノウタ「前駄元ハ尻

ぶ低い。家う些高くたァのウこイまァもウく」「アハ〳〵トこまく

ぎぶ

「ふく〳〵のもうぶりのぶ。ぶと二月の入辺ぶまぶ極くゆよ。ハイ湯ぶた緑

日ぶと子等でぶぶ。ちうも三十年沼をッポトぶう刮ヨハくどぶぶとう

あふひと洗形ぶとおをひぶぶ。フッ。フッ。ト ぶをひと ア臭ん。ア臭ぶ。サアくぶ。

サア臭ぶんポト 大きな声と 足ん サアどぶぶくと云ふ酒洗ぶぶぶぶぶぶ

さうゆえ、おれ。正月のいろ物ざらう。ヲヽく熱いぐく道理で杨梅
ぐらうん
にがゑ。ぞうもの長いるもの。なぜお酒のきふね子ヱモシ悼ぶら
そこらトシてくとお狸ヤまと。殿へとろちの物。湯へあつちの物。ゆまも
ごえんさま
ほうとも及ぬ夏。ライ三ムうあそ呈ぶ。ゆで海老みしそも
宮うゆ飾り。冊ぶぜさうざく。りと酒ぶらうく。ねぶくなるふ
又湯とうあるゆさ。おろちの猩紅の痛絶人利屋ざ。トンく。ヲイト
よろろ。パ出邪大まるな。三助度のひあうい者ざ。おるまんぶろ
トいひすぐふ
中へとびこ〳〵ヲ。あんぐ〳〵〳〵。きろ。ぞうざく〳〵トいひすぐふ。そうや。

ん孫がかくまきとぞん祝物くおれと同じゝぞスア。よくまつ。サア
どのもおこの這へなさいませ。やく結構くゝとぞこ南むあこぞ仏。
ヤレ〳〵湯と糠味噌へ長角かきはをとるぞこ山こまくたいふ
の女の子をどさん〳〵ライおち坊ぞ。誰とまこ女子お隣のをどさんと
よく〳〵まこのねぞありて人ぞ家へ湯の中ぞ〳〵〳〵▲又こなせ人。
私が湯へまるまも腰巾ぞ〳〵きうさンゥ。おめんがあんまり可愛
がるゝさぞ。ゝそれあ人の娘まきませ人。のうおち坊娘よ嫁ぞらうぞ
▲まさうそれも不ぞゝサ。ねでも朝むゝり起るゝぶ。晩まぞ私ぞ

内ふ居続ぐ。弟生ぐ仙でろあつらうよ。悪角ろ法いく
わるぐる「くろ法して痛ぐる拍ふ狼の生れがりぐらう。え
付て離れ極へふ狐さ法。引付て離れへふ石添り煙草の
脂ふく乾極へ内ふ味噌けぐ法へふ生れ付ふ布版
粧でぷットよろろ「アハハハハ」ふる程あへ言さぐよふ。おめへ
ぶ
ぶ
ぶ

人ゝ五せ人こと家内中と掛合ふる。今朝もゆゝ五せ人昌殿
度へ掛ゞあけると云てお新参とタツタ二切ぶ。さうちんそんゝ五
ちやア秋人ゝ四角ゝ切と解と。芋も芋もいれぶふ売参で十八
切。其ゝ跡ゝ切ゝ五結の数子と弁慶禅豆で。茶漬とさうゝゝ五拵さ。
イ〻五ゝ肝と洗ゝきんゝ。他所のおうゝさんゝぶとゝ遠ゝで一文ゝら
の高で日ゝ一日ゝうゝ高ゝうゝ物ゝ。猿もへゝらゝ掛合。
おゝ五ゝ人ゝ早ゝうゝさゝら。ゝ五ゝ猿ゝ就ゝと云ゝて。食ゝ五ゝんゝら
又いけゝ。イヤゝんゝゝゝ五ゝ人腹とへゝ五て物と食ゝふゝわゝぶゝらゝい

物へあそこらく程へあよ。汁が浪香大根よ燒豆腐の寒晒目。お年
をお宝の芋胡羅蔔。牛蒡大根。田作といふ正ど。あの田作
が這へと臭くてそこら程へうぶ。者ども這へてさるぞうのひきこと入年こと。
あ人の正ども。さう仕て出ぞうぶ。アイヤ。田作鮒の燒さのぞ
又六ぞとお目ふかけと。這へちやア仮ぞとむよ。今も少四郎ふ
ぞうれぞぶ。さう食うう嚴づよ夫ぞ。へとお信いかうせ程へ
▲ヲロくまくそんすふたぐらわるうぞ程トつこひうぶ。寺ぞうの少兒
酒嚴捕入れてあき。毋親元まで酒桶のおたと。
やうとと押へ右のまでぬう袋をけうひうぶら「ぞうと」て這へてお玉よ

ぞうもくをとめてだぶくぐそ稼ぎたゝりゃく。言はれんるる。
まへくなせくゝ。ふにのやうに湯が目へ這入るぞ。そを」よすく。
トうるゝ　ふりそなる　宗今度うらおよ。ヨ。ヨ。くも拭でお前やくまと兵
ようくお洗ひっこきとるん昆ごお鼻のやもぞうちらぶご
うらお湯どうけてお洗ひっ番頭さんがお叱りぐふよゝ。ゆゝ
ゆゝと　社子おゆおるぐぞ。上まゆお洗ぐのう。昆おんゆうさんゆ
上まにお洗ぐよ」坊も。上まに。お洗。おうちちゃんも。上まに。
来い　お洗」く。坊も上まにお洗ぐぞ。ュ上まくそれぐつくんる。

天窓うらお湯を浴てハ今の事うた目へ深すん。さう。然く云ふうをもおやぢ。坊ハ半沢が紙ふうぢ。襤褸人をあり法せう。鍋がよろう。落皮ろ。お焼芋ろ。はちいめん。はちんめんが然よ

はちいめんハ何ぢの児はちいもが然いよ。あき声ヲ。

お芋く。ふ八里半。ヲホ〳〵此子ハ三ア誰が子て半せろ。ぞろ

ふうを見て。ヲホ〳〵八里半。いふ事

てもとんぢ。ふと見てさふ。ふんホく玉借屋とふの。然く

まア子耳ふそきんでお忘なきん移へ物ぢぶざんは法ふ。

功者なほ紙おきゝぶこへイエモウ庶の者がら色くるるを数
はゝそどうもなりません。はせさほときゝはゝとふ例なら附
智恵がちがどざんまゝとうらいとぶおちやべりふるりまた
それ又今年ハ琉球芋が沢山ある。焼芋がたくあり
まゝとよゝ。おゝ人さんがらハ多ふもざぶいまゝとめ人がらづくまも
焼芋のあいとゝごぞらいません。さあうとぶらいまゝとゝ私も
初ハ伊のゝもとゝとゝと存ふぶ。八里半と九里ある近いと
ゝとゝとぶと。さありさ。宮ちうとぞ栗ごとらふぶさうふ

まづぎんやと。おまへくさんかどうろ存はせねど。私どもの栗ろ
おいしーうてござりまん。「おとこ」さまでござりまん。栗へ皮をひくぐけ
世話でおいざりまする。「おとこ」お藤の方がもんとおいしーうてござんすほよ
ヨホ〳〵〳〵意地のきたなきるいお吐ぐ併どこのも好物さ子。「おとこ」私ども
でも毎日おさのでござりまん。「おとこ」おんつあ。お芋。お芋をおくるぞ。ト
くるを受て「おとこ」とんざるをあるぞ。〳〵お湯ざりのとや。おんなるを
いつとぞ頭さんがお吐ぐよ。イヤモウ吐食ろうてどうもこまりまん。
家ちんとゆ沢がありきるりんでござりさまそろ根ろ分ません。

まゝごあるゝ人さん。居も教さう教う
うんざうで〳〵それらそのお寺さ
まゝ人さん。とゝ。でもう。家半手も
えゝ〳〵ぢ〳〵ぢ。ぢ。ぢ。

ヲホゝゝ「お湯がお好ぐようごぜんはもとへ「イ湯へ好でござんはもがからんさるもで行水が嫌でこちらへ手らへどうございはせうう。去年は夏いたごまりきおますさん「ヲヤく」どうぢさとでございませう。あつまぶりとなるとうてお嫌ーゞるそうどうぶ。サアく伯母とお湯へおそらり。トまと児「ヲヤく「否く」入。ヲヤきろいお宅相ぢろ」ざ子。ナ、分ぞりくゞ生まれさ「イサ」兎角嫌でこちりはと。サア中へ這入ませう。サアく」おまを捕と」お徳利とおまを。ヲさゝくまつこぞ。坊ハ留桶の中じぶらよいが。

おんうさんいあぶうござらさまと小児坊ぼうぼいおさこ。ぼうらうへ
おいのサアおぢあも這入まらせうト中へぶこきり。ハイ御免ごめんなさいまし子供こどもで
ございまとトふこぶんへたらせあきこ。サアとうに立ても宝しぞお斉せうち中をよく赤色
はせうト。ぬぐうそ湯をあびせあ丹おうへ。おいりもうみさんこの此おこ子
さんゆへあるうちぶらさまうぶらうち水をうめて上あげはせう。サアく
家へお這入たらんまらさまこおいわるくさぶかりあ。おまをいいぶた
まとこれへ有モウかりうごぶんまた。サアく坊ぼうや這入たらせうよ。
ヤレくけうるも湯ぶぞ。ぞさんがうめてひさんそ。ぞてうど

よいお加減ぢ。ソリヤ志ぢとはせうぷぢとく。ぷーよう心もく

（少兒）「あちらいよう。あんうァ。あちらいようう「ナニ」あるひとぢあるのう。

弱いよとらひなさる。ふくよもの祝さんも長ふお言入ぢ

りのぢ。アリヤよもものぢぢさんがお参ぢよ。ハイく。お戯坊ぢんぢ

（ちと）社子ぢよく湯へさりまし。お参ぢとうて下さいまし。ハイく。

ありやお参ぢ。くう。寛ようらう。ソリヤあるくもなんともぢんぢ。

てうぢ社うぢぢらまと。サァく能うく温いて出ませう「寛（覚りぢ）生ようう

ヨウ。あんうァ。出ようよう「サァ」出まうく。ハイ免ぢさいま。

出さうとしてのどぶんきとぴトまぶだくゝ「へイさあうまらあかみさん
おゆるりとお出なさるまし。私へもちくあがりまと「バイさあうまぐ。
お殺さんめどくゝ「どぶさんあめぐく。サテお祥義ともるおらう「ヲ
社も祥義ぐぞぴバイさあうまらしトちゆとめぐせと風呂のところゆくゝ鄙
下宿唄ふ洗子のうきぶ▲山中節「さあ洗子のうり。荒濱そぐらり。
とらふぶうまらふぐ
色のまらふ色。ちうがる月●「コレく何ちを唄ふのぐナ。
共湯の中で唄とうまふめぐ洗子のうり。ぞきあの國ぐら
うまふ「イたゝぐ國ともらうひまぐ紙く●「そんまらなぜ

うたうのだ。〈それでも隣の男湯でうたうぞ。又江戸
とりの女湯へさん這入るべ唄ふりのうと思ひまさ〉る唐な
ことをいうな。あれは男ぶうら唄ふのだろる。女湯ぐらい成
唄うたをむりのう。いろはうたうそあきれうくはへそんなう
よりませう。ハテ子江戸へそだぶ子エ男湯で男を唄うもう
いうだ。女湯で女が唄うちやアうたうのだ子。〈そうそ紙へよ。ぎれっ
てえ。そば屋の女〉いうよ唄うたも然うら唄ひうくはは隠ら大きうる声で
なんだ。とんだ。然声だ。〈ヲヤお松どんだ。ゆめうなあいふ代は

ざるを。おまつは内ぐ紙ゝる。おつぢはけ江戸の水ぐ考こそえる。頼
でも唄ゝしめく。さうさのゥ。そゝその田舎の女の声ゝ。かゝれッ
ぺくちふ。ふゝ人間のゥ。おまつ。そのくせ紙声さ。とゝの人ゝ。
自慢ぐゝる。おまつどくれ。乃印ぐ。実ゝ。うゝひとゝつゝうゝひゝ。イエより
まゝとぐい。おまつが出ゝさゝうゝうゝひゝ。鬼もゝのゝぐ人ゝ食
行人と母ゝぐ。何ゝ。ゝ方ゝ。ゝ。ゝ。

どえのうしゝ
は源氏も知屋るぶらうの▲アイ。まづ〳〵ぜん知屋ほりのぶ
だんどう
坂東のは源氏。それらぎ毎うよ節。いとこぶ也。えとうぶ
ぶー。それら甚九。それらぶ川嵜ぶー。何ぐも知屋るぶ。中
えびや じんく
でも海老屋の甚九がおれぐ〳〵それらうんぐ▲今度
きは えびや じんく
去代ぶ嵜海老屋の甚九き。うんやよ。何とふ節ぎよ。
▲甚九のうドきとふりのき▲うゝひまゝ▲うゝひまゝとぐぶん。
笑うんぐ毎ぐいぐぶうとるぶりんぐトえきる声也今度去代ぶぎき
えびや
海老屋の毛九。祝の代うら小間物毛よ。今ハ小男毛毛やと

なの。おさらぐよ止て大坂通ひの糸物ちよ。松ハ恵檀ふさうり新渡ぞや錦ゑ下ゑのと積で。まごも積まつよ金襟紙ゑ。淀ゑ上て

てんまゑ積で。白帆まきあげて蟬ゑ。ちうて。表上りて強風えんべ

甚九郎風ゑや吹まつゑ。関防灘とも七十五里よ。阪ゑ灘

をもゑ三十五里よ。そうゑゑゆうが津の島灘よ。サアサおせさせ

ぢんど。ちと。松ゑもうもう押せべ大坂がのうう近くする。ゑ九運が然きや

よひとゑ。そう。扶一夜で三ゑ。おれ嬉しや大坂へ着ゑ。宿ゑ。やどゑ。きどどと

てざいや。手代ゑ。ゑ代ゑ。きけべ。宿ハ加賀屋の八ゑ三清さゑ。ちうよ。中の積

物ハ仏くござる。後もござれば海もござる。まごもござる
や今孫純子。そのハ日もよ商仕弟さ。人とまぐるむ町
通ひ。此鄙ゆて目ひ行く人ハ。小浪少橋梅の花よりも。
三味の音を出さと白糸さ面も。口ゞが見ゆ行く道芝さ面よ。
こゝろざしよと乃ぬさ面へ。そこで道芝大きゝ面ゞよ。こゝ鶴
ざーとゝ佛のゝよ。今宵一歩ゝ千万あも。今ゝ表ゝ行ゝて意
帰ゝとてゝひ。りちとごけばゝ長くゝる。これで仕弟ま面ゝよ。
小ぎゝんと「ヤンヤく」「アヤヤ」く道上ゝ子ハ大ゝ面

ごくらう
四苦労く。ペとんざおりろうんさ。アクヽヲホヽ　風呂のなかの人ぐ
ミまく大さうさぶひをる

▲山出しの下女平きまとび出し。ふがる弁のそぐ人りき。升うらうる紙のんで
耳紙をちゃ。ふ回いさ形ゆ。そのごくかぶだよ湯きをえてお
コレヽく伊勢屋の女中。きさ回へとんざ紙声ざの。り。し。女湯
とんざ
髪の毛のうさきぞう
二人り出そうぐし合てお
ぞんぞはいぞるぞ。まるヽヽ。

お山　サア　お川さん。もあ人の沓中ぞ出しる　アイそんるつふざんと
やらかヽくおられ。垢さうぶと紙よ　ヲワト美知の幕さ。
ヲヤもあ人灸がいぐんさの。痛うァ極人う　痛いやなぷふさ
ぶんだ
日本稲の藤の九うら。膏薬買ぐまてそらいさ

お山「そりゃア社うさのあとの膏薬を社くきくとさ。
因こと云 藤のた九八舊家より慶長年中湯島天神の門前おいて創業
万治二年日本橋通二町目ふ開店くより年數凡百五十余年
連綿とお続きと江戸ふおいて膏薬と鬻ぐ家と茂の九法橋
高室見林をえ祖とせり其ち証委くくへ國家万業集よりえ
且慶長ようかぞふれば凡二百十余年ふ及ぶおのれ三馬當主と
金榮の友より故ふ旧家の縁故と記してあまねく世人ふ知ら
お川「コウくお山さんおめへの隣だりゃア。夕もま夫婦喧嘩がめうさの
久くしりのさ。なぜめくだらう」お山「おりふ中の小いさろひとゆふさ。

どうちとどうもいえ絵人るへあ方が悪いといふ国もあるも。高麗
めぐりの者へ。癖として嫉妬いうら。夫婦喧嘩が絵人のさ。
男の裏負をとるぢやァ絵人が。惣体男といふりめを表を
勇ふ者ぢうら。些づつのはきを合もめうちぢァる。そこ式
女房も弱くて居絵人ぢやァ目が明ざふ悪く
やうほしくだうりいて入絵人。まそ物さらんて出る
ろう。さうといろくだまんそだうり居てもとぢと。諸事
あんべいん
悪物ぢたよ。ちうまうがァぶの。もぶが山の形

下ノ十二

ざのとこうろ。かみさんとおつる亭主も世間体の悪ん
ものさ。なんぞの噺序ゆとてくんぐの女房衆ちぐるも
きざ淫る奴さ。さうろ迎。むどくめるばろ能性さ。
えどのひゆいのろせる亭うもたふのゆくいそのこ。ゆぐも
き氣のあ合と夫婦ぐ互の仕合。長い月日みやア好るゆぐろも
移へうんぐろら。お方ぐ不宵仕合ふのさ。隣のあ痴年紙。
づ所痛とゆらぐきんいお世話ざくれと。儀のたふ郎さんを
えるみナ。面ゆきぐろら下りそのおうろみさん丹持立の女房ぐ迎。

冥がな遠がなお縁さんの傍へ侍く。のうけさ新紙えるよ。
麦茎菜の大蛇をあるまで曳伸しとしうあ弟ぐ。なぐアく
薄そそろん居そ。女房が五大力の瓜弾代聽居もヤシヤ
なぶさだぢやァ稼人。お縁さんもお縁さんぐ。なんぐ亟茎出ぐ
迎めんまりあうあ嫁いちやァ稼人ゥ「山」まぐおめ人ひいくされ
ぐ物代。新嫁の肉ゥ花さ。おうたけ子小児でも出ぐく
ぐる。あうあいう稼人「川」ヘン穴蝦ゥあきれるよ。やレ香をかぐの
茶代食ふのと。大笠原ゥ采女原ゥのお緒紙代仕ゆ迎

風呂の鳥が入るやうに高くとまんして居るも
小癪に障らア。人が行きやア直ぐ猪口へきびきまうふ茶を
はいで呑まして。本所の楠生亭とやうぶ格子菓子箱筍
から。目へ這入きうな菓子を出して。おとつあお取なさいまし。
私どもへ房斎たべはけうら。外のお菓子もいどうもはふ
めひまをせんぐんのかめと作声の猫拵さようか房斎も
そこは下ゑい。大福餅や大饅ゥしもむきりくで居ながら
松
一さうさ茶を沸るの琴を弾くのと世帯りちのいろ絵

るさ。阪氏梯て者物氏繩く。内外の者の身ぢんまく氏
ゑて物よとりの出移へ女房の役へ海山ぢ
りる。それでいと氣みいふざァ先さ函の四条利ぢ〳〵アノお縁さんへ
亭ちがはそくさいで持さりのよ。芝居へ代り目くたた九三と
越長二軒へいくし。指えのヲットまうで。自由ざんめへふ
とり移しは替買立ほ。呉服屋へ夫婦連でえ立ま
いくら〳〵へンお願ぶの。ポンニめきれも志移へ〳〵うんの相法ぶも
お縁やくさ。朝ら晩まで。にづけふお縁ぢ。芝神さ函の

お縁やくぐ笑てあきれちゃ。ふけいきやぎらと
ふうみ。色そんな亭主とくふりのへ女きりち深いりんぐ
ゆよ〳〵めの面でもあるりちぢや洞庭焼ぐアるへお縁さんが
お色白ときそわるうらまま嬶揚ゑとところを玉と
金沸焼初うん竹の皮ふ包んぐとふりんぐらうまぐ
しも色白ぐうら七難も隠ものけ目ぐぞあれでまるうらう
りんなうちちとふ組さ。さうぐぐの。亭主へあんな老実
者ぐいくよ。常位ぐ考ぐ引習見立亭ーの女房と拭人へ

きゞ
きゞが稼人のうへ（おりづくち）まで一居る空ぐ稼人らるパテおめへ方で
ぐつ
ゆと打居て変れて。変薬屋（だいやく）の洞人形（どうにんぎやう）さ乗ふ着板（えんだん）
されたぐらうもたまふ稼人ぢゃァ稼人の面（おも）さうさ。そりやァ
ちろちろ（ちゝ）ぢん（ちゝ）ぢんもぢ神さ面がのるくらぢさう旨（うま）いう稼人のさ。
ぢゃえ（ぢゃえ）よしろよそ（よそ）の幸（こう）を打（うち）ぢゃ（ぢゃ）て変（かわ）くぢろちのあるま
ぢ（ぢ）ぢ（ぢ）ぢ（ぢ）

もかみさうんを以て焼ろ〳〵いく〳〵敷とんざるを以て形き。
うちやちりめん
踏考茶縮緬ハ一粒麻子の黒裏で。下へ用ゐ一粒
かのこ
麻子の黒地うら迄一枚二ロ重て。雑縮緬の傷痕ハ
ぶどう
縮子は然ぶ縮ぶ。嵐の麻板の帯は地くく地ハ九寸
たぐ。其ハ
幅さ。脊恰好ちさくふくとして。故人米三枚中年増ハ
ぬつて
ぬつてとい風ぐんぐ。女でさ人ふるひ付くりのとこ。ほ
てゝや男ちさたなくさのう。今もおんなハ。紋友結麻の袋
とれ
通ちさ。ふ者ぐ大勢で其ハ
おうみさんの踏考茶ちさ。

めんくらう。とろくさい。今の女は皆まこい男あぐな惜い
女も馬糞の衣ばうけぞ。あつさうふるまそーこ。ぐんぞといふ
ゐる。男とらふりのたみくいことといふりんぐねへさうさのう。
それぐらら髪結床の前を通るのは聟人
も立流なるひさ。髪ぐう上方風で化粧まぐとろぐり上方さ。嵐色
縮緬ぐうけが伊豫深ゑまる裏さ。どんぐ能上りぐろ。あひ肩
へぐろと茶返しの比翼で緋縮緬の繻絆。めんぐり白えり紙
かけてまる儒子の帯ぐうもりく徐人風俗ぐんけ。よそのおうさん

遠き押通されし婦人形ぐち西月を拝ぐまぢぽいちまらうは
婦人のさ。あの風いよく〳〵然月日の下で生れた人ぐらうよ。
そりゃアさうと一面よ伊達深ぐの表アイサ。路考茶。嵐う。
伊達深さ。こん形昔流行さうだぐぽく流り過ぐぐ
さうさ。深色も案ど云ぐ物ぐぐぽ。一人ひ絵ぐさ人ぐ首
〳〵昔物ぐぐ人ぐ生ぐと子。今の目ぐ絵ぐいぐぽサア絵ぐ
と云ぐ一人ぐ名の二人ぐ名ぐ流行生ぐぐ。ぢど丁ぐ子茶
かぶぐこんぐぐ。今の扇や路考茶ぐ近ぐの物ぐサ。いぐ深ぐ

まつぷと大むかしを物ごゝ桐ゝゝぶ舞ゝゝ後人居て今
又ぶゝと流行のぶきうさ。私ホが内の婆さんが話ゝゝけ
そゝゝやア然ゞ。なぜあんなふ上方風を嫌ゝがるぶきうさ
ゞまれ新人よ。ぶきうさ。あのまア化粧の仕様を出らんゝ。目乃
あちゝ人紅を付て雪て。その上へ白粉をとるゝら。目のふちゞ
うとあり赤くなゝて。おーほゝゝと破とゝふ赤色かえるゞ。ふる
ゝゝ吉又ゝ新人。そゝてもあゝ。夫ゞゝりぢやア新へゝる。新の白粉
と。生際の白粉と。襟の白粉とゝ。別ゝふ有ての。眉掃も

三本八ゝるとき武ニヤ大盤らしい。私しゝ眉掃さん髪結へるものとや
武まざらしらのぞ女をおえ。本面屋ともゝひさうふ新ガてらく
しそ。濃よ太夫屋ごうるぞ。あんまうべさくと化粧しこのも。助三郎
ら上くゝ。えたうこそえうもなるよ。濃ゝの婀娜ゝうゝ云てゝ化粧
がさうぞ。ゝしゝて結うる武そしゝての。鼻の先ざり一服べてこくと
濃くはらける風ガあるぞ。あれハ今侍上方の役者ガ姫さうとゞッサ。
何とうゝの女形の鼻ガ人並ざうゝ舞座でえゝ結へッサ。役者のう。
役者の鼻ゝ人並より少ゝ高ゝる方ガ見能い容ざる武美ざ

から其姿形の工夫で。鼻ぢり別ふ白粉と濃く付てふ。こゝ鼻が
高くつんとして。眉墨が美くつくとさうさ。おすべいっ
利方ざ。それと町方の女中ぢ。きの似てとる物ぢうぶんまう人ず稼
ふ江戸の女まぢぞう。式頃いちふほうぶきの似ゆと。おきうしくが関ま人
かけるず。おれい役者とふりのき物ぢうぶ。きとんの結と
ぢりり考えのき。それぢうぶ鼻を濃くとるも恰好が結ら。
平人がそのまま稼ぎ。側できめぢとえれるうぶあが
きて稼らしふず。目のふちく紅と付るのも一体い役者のら

生こるやらしい子あれも大うそさうぐらうが。昔うぶとる人うぶ五
うら。あの方へまアゆるもせうよ。高島田のふとく紅ぜつけと人へ老
て目のふちうらまくうるうサ。きまと付て乳飲。目のふちの黒い人が。
大年増ふあるりのぐあり。まくべとそべて上方の女中へ役者
のまゝ絵とうさぐるとうえて化粧下へかほよ香といふ油と猫
ときべ江戸でも役者の化粧とるのぶ。ときべ油と付るぢやア猫人うエ
さうさ。其うの顔よ香といふ物ぶ。ときべ油の花ゑりのさべ乳やぐ
のう事体の悪い。夫よりハ三馬ぐ不二の江戸のあとはけと方が

さらっぷりして。うまくも。ほくも。化粧げ。をげ。極へで。紙へ。それぞ。
一面ふ。流へりるへ。賢ぐ。出まもこの。あれへ。あの色と。似せて。
天。紙。彩。を。入れこのぐ。ぜ。まぐらふ。江戸のこと。付てこと。遠ふ
なへ。ヨヤこへ。まへさうと。暮ふ。買ふのと。庵まこう。ぷりふこ。
あぐふ。
油と。買ふ。やらうや。へ。おまへ。油とお。買ふ。ぷ。本町二丁目の。江戸
櫛でお。買ふ。ぷ。ぷ。油。夏もかへ。ぷ。ぷ。紙よ。ぷ。ぷ。の。目方
がたんと。有。ぷ。ぷ。安へ。へ。へ。

近高白胡椒と
ぐろうて
鰹昆布
の余情を
ふくませ
さるハ御
乃ちなり
甘公

付ハ白粉を撒こうけ「おさえ」お上り「アイ」一緒ふ
行ませう「つゝ」に入り「ぐ」胡椒を買「へ」きゃうふ「へ」
おしき「合」「物」「ふく」「ぐ」「ふく」「ぐ」「ふく」「ぐ

よい物がおくふ合まゝ子息子さん。あるゝへ出源氏ぐ
ぢりはゝゝ子さまうでぢぐりまうゝ。加茂義の新紙と。本居
大人の五の小梯と本ふ以て。出入をいとしうけまし。俗と
るゝよき人られまして。年まを採る習ごとぐりはゝせね。先達て
お嘗ゝさ庚子道の記へ偽ぐ。ハイえまゝ。中く
手際なるゝでどぐりまゝ。考し疑ゝいるゝ。ぬの頃ゝ年ぐ
ゝね古言ゝどぐ今の風ひゝけ。ぱゝひざゝふ湯のゝの五を匿
てゝ校合者の法制ゝどもおゝゝ有ゝゝと。なぜゝれゝまゝ。

ふらせ安子でもの位る又考ふ張ふうこごりはと。先百の外
せきこぶこ
で消ふ高又とスきたぶ。ふ人ぶりのかこごるる。て入ぬで
ごごりうまと人ぶりうおゆるりとは焼ゑるこりはを。ここ入ぬ
ごごりうませうこ。世ふ強ふね借いこごごりきん。ホ三 岭野
ちふ
集をお返ーきこでのこと。ふくは恩借いこます。有がこう
ごごりうまと人りうおゆるりとは焼ゑるこりはを。ここ入ぬ
らけふぶ花を一冊かこ失ひはこ。トントも方ぶーる。ホ三 岭野
けうこ
イヱごこもかー失ふでこまうはふよ。付 関ふあまりこぶぶ

だぶつ（あを）と（ハイサ）ゆら坊（らちあき）ませね。先日（せんじつ）ぞうこわう美り（びけい）たぶ
あるをひ（ハイサ）ぶつ（よを）ちゑ（をし）さうでござりすた（けり）。
りう。お取（ぢ）りのるでござりはと。あまり幸（ちんう）で對（さらう）屋（ゑ）
なぐさ（ぢ）ちら俳諧（ちはいかい）といとしまたぶ（ゑ）ばりうお砕（ぢ）んお耳（ゑ）
入（りい）てをれ（ハイサ）まと（ハイサ）茶菓（ちやくわ）の中（ちう）も。大寺（おおてら）の餓鬼（がき）のもりく
ぶ（ゑ）ぬ（ぢ）ぶた（ゑ）の舌（ぢた）。ま（ゑ）ら（ぢ）夏痩（なつやせ）とらふりのむぎさとりあを
のたぶひ。その対（ちう）あまこ（ゑ）ゑさを（ゑ）。猫（ねこ）の續（ぞく）万（まん）ふよ（ゑ）俳諧（はいかい）
とゆを（ゑ）ぶつ（ゑ）ぶ（ゑ）ぶ（ゑ）ぶ

ゑのこぐさ
ぐさうはぎ
ほと
イヱモウ。
松のおりうんうもそぶ
ぶしでぶぐさう
まと。此るま。あまうしやう頭ぐぐさうまんうぶうちんそあぐ川ふ
いして。さる。ぐいぐぐきはぐぐさうらぐ。うあぐど一首ぬまと
うはぐりのあぐ川りちきあさもよ
きとの形ぶまぶぐぐくこ豆食ふもよ
といしぐ。ぐ。ヲあぐ。ヲあぐ。冠辨とあうう立入て。ぐ。ぐ。ぐ

ふ入こふ。おんなり。おきてでごろう。はせうよ〳〵。ゆおきえん。ぢぐれ稚の
道ぐどぎろ。はとりのどうかこ。ぢぐのあべ川とかこり。あきも
よしぎとうけて。ごろあもよう〜どうもいきせん。あるこ
お這入なきろはとろ〳〵。ハイまづおさきと。ざろ。引這入て立ち
小桶と三ッあるで。ヲヤ。おぞきんよく。まるとろこのぢあきあも
ぞろと押なぐ。まう。日手ぐぢぬの人▲あこヲ
姉さん。今ふまろ●ゆぐぞまんぺ。代のくぢもこぐぢぶ。
そんな元ぎだもア。強くなる▲ヨヤ。おぞ。ぢさん。聴なせ人
▲又初ぐしく。泣ぐのぷ。おこア。ぎうお。正月の耳ぐこぐぶ。泣ぐの。強

役人ばかりぞよ●泣くもぢやア役人ぐの。聽くせ人野良度が又婦ゑうとる

▲ヨマ●元日ぐれる出の迎袴羽織で吉の形ゑを五種香ぐ

とぐぬぬ手玉物と持せて出ることろひうせ人▲ラヤ●さうとるとえ日の方

ゐうんで。主ぐうり取ろうら。金ちんどうしとぐ笑ちぶ。仏ぐ人うゐる

かぐ先人取れと云うぐうり中ぐうらつ。うちぐうり取り中ぐとゐう

あんうね。ねが指りと招ぐも吉ぐ指せて袴ぐるくとひんまらく

とぐぬ手玉の相の中入ぐくよとこのさ。サア又爺さ。の耳へ這入ぐう

大ぐぞ。ぐ保元日ーまうら這入ゐもあるぐ。追付取ぐうとら

おまつて。待どくらせどサア婆ぁんぢやア絶人。然るうちそも婆ぁ
絶人ら。釈仁どのこつとしふぐうり食てかくほつこしもどうも居
たくはくらぶ絶人ら。下詰屋のげそうれんの酒屋いつけ屋の鍋さん。花や
の松さん。酒屋の金さん。酒場へ出る伝方が平まで探しあるうぐ。
友達ともだちこうなる内ふ居るのさあくせく仕果て内ふ居るとあ。ゆうべ
のうりと婆ぁ。ほうと平ぐ。内へ這入れ絶人ら車屋の大八さん平人
うせうのさうね一人で身ぎんまくでもうるうもおめ。いろいろ私ぁ
しり尻とねぐらせるぐ▲どうのもさうさ。けひまで蟹糞の世話とも

りのぶ。宮ゝ又金屋をたれうけぐさ●イヽエサ皮ぐ悪いうゝゝくゝ
丙ゝ外ゝ行ゝ。ぢ隋馬を曳連ゝ。めうり近所の恰好も
悪いふ。老角 外ゝとふふをきゝ後ゝ▲正月ゝ四ゝ馬ごの
牛ごのとゝ連てきんざも仕まつるぐ。生ゝ流ゝ川色で送りぐで
たゝきゝ出てとぐ敢のさ●あんみさ。打てもきゝても。糠ふ汁とふく
牧ごうふゝ。ぢ後ゝ▲それで内ゝ入ゝとうゝ●初ぐゝ驚動
とゝ多も悪いうふ内ゝ入ゝまゝこれど。けゝ平氣でおきゝ事ぐ。ゝるぐ
めりやゝ。ぢ後ゝけちゝ出て遊あるく。アノモウ家業をおゝとゝゝゝゝく。

なさける奴へ一ぞん癖り者さ。遊居てうくゝもとと仕出しやア後。
よまるも惜るも淋と生ふ子段ぐうりで。友達めぐ又うくゝもの人
ひとり一人も後人。仕中もあんまり炭遊てる生るうら異言たらぜうとと色
ふ夜鍋として居るとや寄さく。友達どもが集いさときて八踏込
げと
ふ下話が重ア合て足の主湯ぐ後人ぐ。サア夫うそやや。指合様ぐそ
の女ぐ色で。起て居ふれ後人うら。ぐだして森こふりとしてゐぐ
に出しとで者ぐけぐ。大福餅ぐうらゆで鶏卵。お芋のお田なんぐも
通るものと買うと云出して騒ぎ。御膳表版温ぐ。まとと

買ふ。正月屋でございッし買人と呼ぶ。どこの國ある人。換聲と
六人まで呼迎ぐ。手ぐふ信ど樓せるぐら。風鈴蕎麦ど物仕事
ゆ〳〵。蕎麦屋炮をさせそハとち食ふご物ど。有頂天ようんて
夜鍋仕事もてほふきくんぢやア縄。世間ぢやア解ど搗くの煙と
掃くのといふのふ。甚勘兵もなく。寒声をたうふの宅〳〵声ろを語る
のと。毎晩手宿ぢ。あんまり手と忘れて大世日のまるとも
ちゝ親へのさ▲いやとやとまんさりんぢ。些と大屋さんでもお頼
まて異見して貰ふが社のき●そんなことふでもせざァうるる人。

ホニ〳〵くらう若旦が止めるを。子と持べ七十五度泣くとらふがあの
やら郎ふかくんてい何百度う数がきれ程へゐる▲息子がざと呂ふ
くら悪い。郭公ごと呂んて居るせん人●あぜ▲八千八声啼くと
いふから●あの野良ちやア程へ。ちうちが泣くのごへゐる▲そんなら。
ほとゝぎすとは●けとゝぎすんゝ又はけぢやんゝと●アゝ〳〵■おまへきうら
おいとゝをとゝぶいと歌。俳ゝ不順でアまうちぢもやいそゐる歌二十四五のがつとり
りの。ぢそんぶーの髪の風もぢとゝぢるおまへきとんえんえくゝ人ぐらうくいまうかくちうう
おまへとこの小おとゝぢ。ぢるき祖母ぢ風俗。おとゝりの　初　お初
お嬢ぢをさゝ貸せて三人づれ留桶とひえてべゝくゝの長湯　初　ぢ
ゝんぢ　初　あのこ　おゝ　ひとさんのお髪へ。今日のこへまとゝふ恰好ぢ

よいぢやァござらせんう袖へ「さうさ」ホンニ あもとさんのお髪へ
どうぞおむすびエ「こと」これうエ。呈へあのう。物でごぜいさうとよ。おう人
きんもいの悪七子「ハイ」「めれへ」私のところの地面の彩るを
見てとりすまとぐ子。其かとさんが結きまこと「初へエ」うる往時日
らいかく傳ふお出ごさうで。路次でおんうけ申ほうとプノ寄藥
みおかや中でごぜいませう「アさあうさ」「まこと」ふおとご子
根掘ひらめらゆつふ掘うとさのご「ちと」畑ぶ上ッてさぢやァ
ごぜいませんうエ「ナニ」おくれ「柄」でまことふ祇うごぜいまんよ「初ホンニ

まことに感ぜぶ。私どもハ百で調ゝ米と一度ふいてもらどらるゝもとおもひぐこのうゝ百が
此生ハ出来ませんゝヲヤ母ハ
言いなぐ給ともとおもひるゝヲヤおひまきんぷるゝもとも。
米と一附り給ともとおもひるゝヲヤおひまきんぷるゝもとも。
ゝゝもう感ぶるおもあんぐ稲工ゝ私ハ各代のおてんぐぐ物と。
ハイおもちゃびらとおてんだとも。一人で背負てゝりまゝ子。
えゝん感ぶるおまあ母ぐぐよゝヲヤゝおまあ母ぐぐと扱子のゝ母ぐぐ
ほまゝよゝゝおまあさんぷんゝ人私ハ又おまあぐりの事ゝと
ぶひまゝ子と銀とゝぐ。春とさぐゝとおもひぐゝぷぷおまぐりゝ

おまやぐでよいがまエ　初「いうるのそもあまさん　初「やぐて
お面黄へお上りぐとつうりまのさ　初「さあうき子エ　おーつけはもまさふ
お上り拵ぐとまへこと家うち丈和洞でお人極よおうりぐ拵ぐ。
其方あへ私の且那さ夏の毎うにたぐど。猪山ふお髪とおあげ
さ〜也拵ぐ〜ぐさぐ〜ぐ〜ぐ〜

又お規式の付ごろ居るものもごぎうほうのさ。四月うら九月をてを
何方さまでも帯ばございますとうら。お櫓へございません。みな
お下帯ございますと「下帯」とへお下髪の形きりめへイエ。
お下髪へ五節句などのお規式でございますのさ。お手寄き髪
方へ長うけとりて長をおろけ花を。お傍さはあぐるへ中ともお掛花をも。
お小性へ童でどざいます。お眉をお付花をもさげ髪にお結
遊ばすとおる髪もどざりはものさ。ぷつまへそへ略しうさ。
おいらたちのおやめの下帯というのへ子。心の長く言遣入ると

えんぎ　なれ
きれまくく。性鈴が狐根とひうげと中うふ毒つきくく。悩の
ゆくや　初
狭い茅でござらませう「あれも役者のいるものへ毒つきりしと
ちゅう　きんぐん　初
居るぐぢのあうちぢやァござらません「紋者を狩きぐざうくくこ月の
さげおび　で　ちんとう
帝旬ごとこ下帯で生るれどこそ。真へ四月から九月までの間ぐ
ふんどし　しろ　ゆもぎ
裕と羅衣の附候よ用るのさぴさりして。二月と十月へ帯付が
あのじろ　ちゅうぎ　しろんぎ
間白さ「ろ白とへエ「間白とへ白綸子ふ紅絡裏をはけと
いしゅう　初　ちゅうじろ　よも　もも　ぞん　ぞろ　初
衣裝さ「中白とへ四方の味噌ぞござりまちよ「ア」は焼。お初
しゃ　しゃ　初
どんがあんつまふお酒煮ござよ「お酒りぐうエヲふくく「ヲふくく

そして、三月のうちうけハ、三月のかけハ桃色と、五月の清
節句ハ綸子の想模様でございます。綸子も
あり。ちりめんつゞれのさ、ちりめんつゞれハ、さらしの想模様。
七月ハ、七夕もの。ちりめんつゞれ、縮ハ六月と。二月
ハ混るゆうでございます。縮の想模様もあるが。大体ハ
ちりめんつゞれ。ハ朝が箔紋と、紋と、紋の紋の紋
ゑ物うゑ、イ、ゑ紋ゑや想模様を摺箔でおらゝ物さ、絽縮ハ
五月と八月でございます。そして、赤ゑ物うゑ同赤ゑ物うゑハ、さ

「きうさ。お系猪へお正月のお規式のはじまりとやらとまへイ
さまうごぜいはもとこまエ「ヲヤ〳〵もじ巳いらんざまエ。私のまうなる。
おそんざるぞんざい者へ。はもとの公ごうこう勅りさうもまの孫エ「ハヤ」それ
でもけつうう勅りはもとのき「初」おしさん。お脊中をお生ー孫せ。お流ー
ナまうさう「イヤ〳〵ようこうこうごぜいこうこと「おしさんおしさんお生ー。ナ流ー
おりこひ「サアく〳〵お出ー孫ぐ世「ハイさまうまうこうお出ー孫ー孫せう。
ヲあつ「ヲイあつあぶあいぶうあ住ぐ「叶湯りぐめんまり熟ぐぐこうう。
はの燒痕りぐ「ア」又ぐまうだんとおつまるよヲホ〳〵ト二人大きふ

初チロト水とうめまをうう　そのれハ御ぞ子　いうるやおもさん
の酒屋あの感心ご子　まつとふく感心　私もまつとふかんしト
このちちおもさんや　ハイ　おまえ又今宵も私どもでお琴
せうとうじわる　おもさん　ハイ　おまえ又今宵も私どもでお琴
とおさうひナハイ　おやまつくまつ　おんしまるうんぞ子　ハンふ
おもうさんもお御ぞうぞ子　まつくまりはまをうう　まつ御ぞうぞ子
はまをう。ちんゆとうゆございすとよ　アイちんとう迎ナ　ちうとをとさ
物うヱ　ヲヤ嬉しいのう。今宵もお琴でおざいやとうヱ　有がとう
ございまをとヱ。おひとさんのお声　ぶつつまる　ながぶ。まつとふく感心

なお声でごぎらさまとよ「ハイサ」さまうでごぎらまとよ。細くてお寿
番ご。意きまで駄くきそ。さんのかのとお初どんおりーナ。駄加減ま
なぶってお呂よう「初」「ア」勿体ないのつきふおなぶりませう。
まくとふくーかんとうーでごぎらますのよ。子エめるさ「ア」まくかたらう
うそらとごぎらのさ「コウ」くお初どん。おまえのお好と毒うえん
はせうろ。お初よ。ぞふうそ。アくきれくー。業慮のかりーまそぶ
らうぶ「初」ハイさまうでごぎらまた。私へモウくくーめれわど好くさりのく
どぎらまうせん「寿」がくれへ誰でも好きふうき「ひとくくーの仇枕。

わんわきゝ高やけゝや。といふ所へまゝとふ紙のう　初アゝモウ
おんなまのおきまゝ。あとこの所と業ゝ形ると髭が解るかう　すう
ふ放すぞよ。
唱ふおんなゝ有り出ゝそもぞんとゝ所へまゝとゝる　初もゝ初どんへ伝
でゝまゝ遠ふふうさうぐよ。私が暗ふ唄ひませう　初ハアゝ有がうう
おさめ　山坐さんのお唄ひまする西を初ふ聴せこいのう。ホンニまあどう
ゝてあのあうる声が生るう　初おさめさん今宵へう形さうひませう
おさめ　おと　アイ　さぶうう　まだ稚特さ　おさめ　アイ　江の島　初江の島ゝ。ア有がうまゝ。
江の島ゝ有がうまゝ江の島　初アハ　初どんへ弁天さまでも洋

しゐやうぐさよ。初そんでもおまへきん。江の島へおりやうぐぶしやうと物と。
あまさん。あまさんそーて子。長恨歌も能る。ハイさぶひきぶせうぞん。
きんぐぶがり。江の島。長恨歌。とそれうら位す。それうぶ那須殿
へさんやうくまアさうぶ拾て歯すせう。初ヲ蛙ひく。サアアく今宵を
大ぶのもじく。お店の元ときさごのと道中双六を使さうぶ。ゆうこと
きぐぐ。武骨牌ふ使さうぶと。ぐぐお琴ぐぶ。伊もいぶぶ。まとふく
お琴ぐぶ。山王ヲヤく。お初どんすんでぐさいました。お琴と。ぶ
りのへま。笠瓜をきるしてお琴者。ヲヤおとこぶやア極人従者者と。

初ヲヅットく言うれどとハまを言ふよあんーあのほ▲これハ二十ばかりの女人。義太夫のけいこ所の
如ニ方とものーく。初海義さまでおまんまをたべる娘ろりが。今ハ老まの妻
となりぴゃの子のけいこハ代うきさんのうけ元とうんえうり。生國ハ南地さんど。
浄るりのにぐせと。高らのうこぐさ。嬶ふうぶれて。詞遣ハ土佐ろるまり。かやの
ろうこしひょ似合ねのどのふとさと。ろくろのぐとと声へがんぐんふいっまりふた。
ふとぎんをの一のふりて。紙ようけるぬろうぶくろうをロふくろうく。かけざをとうら
ゆうこと。えぐーぐ。ひくくとと糸ふ中くこひうぐら十六七のむすめあのふよ向ひ
●少法さんおやう人今お出ろ▲ヨヤ住吉さんろ。今さ●おやう人亦人。
老人尼の天神いええるうる▲祖ぐの●こしまりの天神の
トグリぢやうひる▲ウろくかくろ潜人ぐころ●茶飯さんよ
▲さうさ。あ人の方ぢゃ。老尼の天神とあぷろちの方ぢゃの。

茶飯さんも生姜の癖と金びらかくとらや。浄瑠璃ぢやア。
なまる癖ふ味噌を揚るふ。方合せでからら潜人とらふみ。
えーもこ赤さんが渾名の号親さこ●ろくらく。煮売へ荏柄の
天神とんやえるがからら潜人へからら仙人と生えるが。むごくさこくふ
さるるこらい。可哀さうふたらけのふ▲甚こさこ。なまるに絶ぐるさうふ。
本ぶ有あるとも遠稲へうふこさ本同然。あれで床本を大繁くさせて
拘りそ居るぶとうい●甚癖本拘ぢやや。死んぶ市をんらふなまだ。
あの人の若い時ぶぢりはらと本さふ。亀さとらふが有ふびる。

我ホとゝ時代遠ぢやうゝきくんろ　とゝろちやぐ。まゝとゝろそろ。とちぐとゝ
ゝぐの個まぐ江戸者の京佐まぐや。ぱふ書まとつけてゝみのゝぐ。江戸迫の
おゝとの志れるゝあり○亀表とゝ大坂わりの床本彩考し。江戸六ぐゝ或ひゝ
たゝまゝ中本あゝちゝとゝゝつせり。正本ゆてゝ本町そぐちをけぐあゝとゝあゝ時代の
江戸浄ゝりにあゝゝあり。ゝの佐ゝり本の書体ゝゝゝ近松付代の書法を極て
一流ゝり。ぱ亀表ハ章ゝゝとゝの名人神田組五町ホ住せーぐ天明中ホ没ゝ。
○市ゝゝ一流の上ゝゝ江戸六ぐりハぐ。ゝゝまゝのゆゝ本ゆまゝとゝつせり。正本ハ
納太刀姿絵を出ゝるのゝ。中ゝゝよ住せーぐ寛政中没ゝ。ゆゝ本近年の彩色
ゝりし。そのちゝめぐのゆゝ本ゝ出ゝれども亀表市ゝゝの右ホ出ゝりのゝゝゝ。
○行ゝ佐とゝふ人本町射ゝゝよりて志まゝのゆゝ本ゝとゝつせーぐ。今ハいぐぐゝりゝや
ゝゝぐ。○亀表市ゝゝ行ゝ佐おのく浪ゝゝの表ゝりし。国ホいふ江戸板の五行
表ゝ六行のゝまゝ者ゝゝき中ホ中古の名人ハ古人金三ゝりこれゝゝゝぐぐ小十郎。
ふきぐ町ホ住ゝ人ゝゝれつき御器ゝりゝ文句ホーゝ付とも一点ゝあやまゝとゝ
ゝ。その後淡ゝりおのく江戸本の六ぐりゝ表三七ぐゝ。正本ゝゝゝとゝゝゝ
りのとゝんゝゝゝ

左まの方と部屋あるぞ。そこらる小十郎亜七郎と癖と
江戸六くぐりの手法美ふ〜ぢけの潜ときるもの南附又る所あり。
それくら渡よ吉三郎どんうそるいる人よ。待てちらて出せと幸ゞ。
なんぞも有げる。アリをぞきたんどうぢや。〜〜▲あの芋隈の
いとあゞが切れくきんそ。トあまりの風の毋うふくの角ゞ紙ぢや
あいう風とらくぞ。いうのゞりとらゞ上三方の▲茶屋級さんを用
ゞあるエ。●八 これハ迯現 きゞまアア長いるぢちやゞ。九日頃よ初舎と
翠屋閑とゞどうちやゆ〜そ。主命を試さきとくぷ。お新すたゞ。
ウミテあのチ。お宿と巴屋中ますてうぞとおきくせゆ。ますせんさうい。

こちのもわつとてゐどいつぺきと
はでことと
いつかぶし
江戸者の
ゐまよ糸
伝やろふ
紙さう

よろづうもの。お新戸はとと。山花ふきのそお昌れ▲アイく、さう会
ませう。何を生ごつきる●さうれがそこぢやて連中ぐ多ひさうふ。
二時人でも余る。ごまらはしてもこ抜き掛ふるふんさうい肉
でもわつとしてわるいらる▲うるやどまぢやア剃るりのぐ紙人のう。
稽古のふ紙人物よしと。ぐぐあ人へ足取ふきるとい物う。
世話物でも流人なるう。二ッの肉ぐの●それらる。主金るも稽古
のかぐらん物とふふう。忠臣義ひぐる。菅丞。千本。まつ山花ま
物ういぐどうも流ぐいまる●さるまぢやふうてこまるいい

なト上人ハイさかうろう●おゆるりとトワタクガ
まるハ 時の流行と共ふ

男出まり
風呂のせんたく

待なナ。邪ゑる人ごのう「コレ〳〵三助どん。今ろう些と
ぢまし 「巳」ハ彩して壷ちいご。松の内早
仕舞といふお定りごろふ。ちうこがごごらやせん。そりやわけ
ゆゑ「ヲ情様人のう。おれが形ごらうとおりて氣がせぬと
れど。礼者ゞ来屋でヤット今まつた。せあて二度這入
と舛ふ。タツタ一遍「ヲヤ〳〵それハお寒ろう。私ハ仕合せと。
浮世風呂ものちれで三編。板元の金渡。又ごゞ門もちりとねけ

ぬ。穿うぬきまゝ。番頭ぐ。揆揆とる門口うら。

●陽茎中入きまる。

「ちゝどもと」名れとられば。

浮世風呂三編巻之下大尾

年頭佳儀　本町二丁目延寿丹　武亭三馬

精製相入法藥

代二十五文

上下ともに五服つゝ。ふくろ書とくとよく

見方の為かくのごとく製法と薬味の

金勢丸

陰中ちく宝丸　二十五文　四十八文　大包百文

沖一どくけし。酒の酔とさめ。もつこの二乃こより

ぐ月少れ跋

藤井蔵書

ひなつぐさ捨く俗物たち

つまでとのひまでとの顔向乃毫

ごりんぐわ

きょう

まさ

とくぷ又二編をまづ上げ面白も看官扎興ち

ぞ

ぜひ

あらぐ。て不全詞ひらぐ拙。是非ふと頼む

たんのと

豊宮谷り

みまけ

きょう

ひ

ま

ぞ

例の懶隨ふて去年も竟に間ふ合ぐ。孰も

こゝ[illegible]本石浪市ゆゝ隙ゆ従ゝ[illegible]吾儀仮

おせんべ出来ぬ作ならず

詮方なし。亡者ゆゝ繋りし

えんと男時勝外

来ぬ世石渡が新板物。骨折甲斐ありの

と。計か流行ゆ。人氣ゆ遇て評判の

おせんの

来ぬ嬉ゆ

とゝまり。さゝあれば博物

猶彌増ゆ

乃他の作者に引くらべ。在下が拙作はうんと

せう。繪師と作者と板元と たがひのこころをけ

て仕立あげたる小冊の。うらべとろぬ 封めも。

遠く封切にして。雲ゐる人の山なれば。其法

異買ひ法を信ずべく。京阪までも為登荷左

櫃ひかり 書者かきやる 五大力 たべうもぐ 前

編ふ

【ゆうるうまき世せい】。

【ずてあぞく】

清ぢ清らも。赤面白く四篇目ふ。残り條を

【ゆうぞく】書らふ数〳〵ふ言ふ数ぬ窓

【とあいとも】。

武まぢぢて

ぶんをちふん　まんびのごぞうろ　やうろ　うきよ　ろ

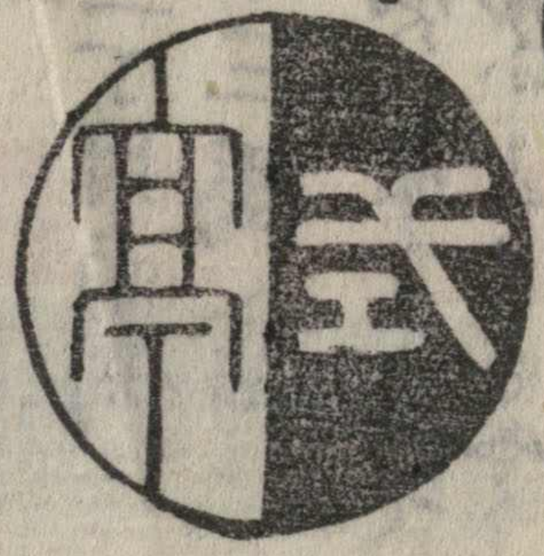
と志てのふ。

文化八年辛未五月八日。浮世風呂

三編乃稿を脱し錢湯に浴する刻。
風爐炉中の鼻唄を聽く一篇の狂文
成れる。仍て此書を跋に換ふるのみ。

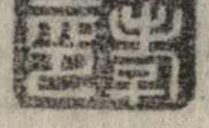
たらら樓のあるじ

三馬しるす



江戸人

德亨三孝書



三馬店ひろう

仙方延壽丹

まちまち祈りやく

関東賣弘所
江戸本町二丁目南側
式亭三馬店

●のび悪引下たんせき小便即功あり
かくのごとき二三匁分用てたちまち効あり

●諸虚百損を補ふ良薬なるべしよろづ其ほかよろづ
中方ハ持薬に用ひてかならず効あり天下の病二条分用ひて
なるべし一生を病ふしてとこやら
相続とて京都大坂ならびに諸国において賣弘ひろめハ我延壽丹
ようやくまる世人よくもるを知るべしハもろ小いろ便

▲値段 百文二百文三匁四匁銀二条 ■諸国小取次所あり
金百疋 壹朱銀二十匁

京都 田中宗悦製

文化九年壬申孟春正月發兌

本石町十軒店 西村源六
江戸橋四日市 石渡利助 繍梓

江戸書賈

28091

国立国語研究所
1001952322

汴尺書畫 汴尺橋四時市石渡秋月

9
34
2